5．原（はら）　抱一庵（ほういつあん）

(1866.11.14 ～ 1904.8.23)

明治の一時代、作家・翻訳家として盛名を馳せた原抱一庵は、二本松藩士柏木喜嘉三の十三男として郡山に生まれた(本名　餘三郎)。

２歳のとき、福島町役場職員の原太市の養子となり、裕福で自由闊達な少年時代を過ごす。太市は、袋蜘（たいち）と号し、百人ほどの弟子を持つ俳人でもあった。

１７歳の時、河野広中等が起こした自由民権運動の機関誌『福島自由新聞』を発行する鳴岡社が自宅向にあった関係で、時々短文を載せていた。そのため明治15年11月の福島事件に巻き込まれ逮捕されるが、未成年者として釈放されている。

その後、上海の亜細亜学館（後の東亜同文書院）に留学するが帰郷し、札幌農学校（現北海道大学）に入り、クラーク博士の教えを受けた教師達より、聖書・シェイクスピア・バイロン等西欧文学を学ぶ。翻訳文学に傾倒し熱中するあまり、他の教科に興味を失い退学する。

明治２３年、尊敬する文学者森田思軒の下に寄稿したのを縁に、思軒が勤める『郵便報知新聞』の文芸記者となり、饗庭篁村、宮崎三昧等と出会い文学活動が始まる。内田魯庵は『紫煙の人々』*1 の中に、「見るからに神経質な瘠型の青年で才気は眉宇に溢れていたが、対応態度は田舎々々していた」と印象を書いている。

明治２４年、少年時に体験した福島事件を元に河野広中がモデルと言われる政治的伝奇小説「闇中政治家」*2 を思軒流の漢文調で『郵便報知新聞』に連載*3 し、読者の人気を集め作家と呼ばれるようになる。また、新聞の付録として発行した『報知叢話』や雑誌『都の花』『新小説』に「幽棲」「青春夢」「月珠（後編）」「白衣婦人」等の創作及び翻訳小説を次々と発表していく。

明治２５年、経営上の理由から思軒と共に報知社を退社し、『仙台自由新聞』主筆として仙台に赴く。明治２６年、養父の遠縁に当たるカメジと結婚するが、養父が亡くなる明治３３年まで、妻子は福島の親元に預けたまま、東京との間を往復しながら文筆活動をしている。

その後、東京新報・東京日々新聞・萬朝報・朝日新聞と各新聞社に席を置きながら、福島県出身の高橋太華が起こした少年雑誌『少年園』に、ユーゴーの「レ・ミゼラブル」の一部を「ＡＢＣ組合」*4 の題で翻訳する。他にもアミチスの「クオレ」を『十二健児』『三千里』などに訳している。創作としては博文館刊の叢書「少年文学」に『大石良雄』が取りあげられ、また、明治２５年暮れには青木嵩山堂から『新年』を出版し、当時の少年達にも、和漢洋学を兼ね備えた作家として、巖谷小波・尾崎紅葉・幸田露伴等と同様に名を知られるようになった。

抱一庵は自他共に認める森田思軒の後継者として、大衆性の高い西欧文学を漢文調の美文で表現し、当時の読者にハイカラな新風を感じさせて人気作家となった。最も名を高めたのは『闇中政治家』であり、リットン原作のユージン・アラムを『聖人か盗賊か』と訳した小説のため大衆作家・翻訳文学者といわれた。一方『東京新報』の「従吾所好」と題した欄を担当し、日々文学作品に論評を加えており多くの評論文も残している。これらの業績が大きかったため、児童文学者としての評価は隠れてしまったが、少年達にも、『大石良雄』『新年』『三千里』の他「王子村舎雑話*5」「西泰詩人の幼児」*6 等多数の作品を書いた。

明治３７年８月、生来の大酒に加え神経質な性格から精神に異常をきたし、根岸の精神病院で３９歳の生涯を閉じた。父袋蜘（太市）の眠る福島市信夫山の墓地に埋葬された。現在では市内北町の自宅付近は国道となり、文学者原抱一庵が、福島ゆかりの人であったことを示すものは、この墓碑のみとなっている。

---

*1『紫煙の人々　魯庵随筆』内田魯庵：著　木村毅、斎藤昌三：編　書物展望社　1935

*2『闇中政治家』春陽堂　1891（聚芳十種　第五巻）として単行本発行。

*3 前篇は明治 23（1890）年 11 月 7 日～12 月 9 日　続篇は 24 年(1891）年 3 月 3 日～4 月 21 日

*4『少年園』第 145 ～ 156 号（明治 27.11.3 ～ 28.4.18）当館所蔵は復刻版（不二出版　1988)。　JZ05-シ 2

*5『少年園』第 126，129，143 号（明治 27.1.18，3.3，10.3）当館所蔵は*4 に同じ。

*6『少年世界』第 2 巻 15，17，18 号（明治 29.8 ～ 9）当館所蔵は復刻版（名著普及会　1990)。　JZ05-シ

【作品紹介】

◆『大石良雄』博文館　1897　　L913.8-H2-1
◆『新年』青木嵩山堂　1892
◆『伊国美談十二健児』アミチス：著　内外出版協会　1902
◆『ＡＢＣ組合』ユーゴー：著　内外出版協会　1902
◆『三千里』アミチス：著　金港堂　1902
◇「新年」『明治文学全集　９５』筑摩書房　1970　918.6-M8-95
◇「一二健児（抄）」『少年小説大系　２６』三一書房　1995　J913.68-ｼ-26

【参考文献】

◆『近代文学研究叢書　７』昭和女子大学　1957
◆『日本文壇史　５』伊藤整：著　大日本雄弁会講談社　1958
◆『「仙台自由新聞」と原抱一庵』金沢規雄：著〔金沢規雄　1959〕「文芸研究」第33集より複写
◆『日本近代文学大事典』講談社　1977
◆『書物展望　第６巻上』（復刻）隣川書店　1984
◆『明治文学全集　２６』筑摩書房　1981
◆『内田魯庵全集　４』ゆまに書房　1985
◆『近代作家追悼文集成　２』ゆまに書房　1987
◆『埋もれた翻訳』秋山勇造：著　新読書社　1998

【略年譜】

西暦	和暦	歳	関係事項
1866	慶応2	0	11.14岩代国郡山の旧家、二本松藩の無禄氏族柏木喜嘉三の十三男として生まれた。名を余三郎。
1868	明治1	2	現在の福島市の官吏（福島県庁の役人）原太市の家に養子に出された。
1882	明治15	16	福島事件に関与したとして捕らえられるが、未成年のため解放される。
1890	明治23	24	報知新聞社に文芸記者として入社。外国電報の翻訳などをする。
1891	明治24	25	『闇中政治家（前編）』を「郵便報知」（明治23.11.7～12.9）に連載。
1892	明治25	26	「仙台自由新聞」の主筆となる。
1893	明治26	27	8月養父太市の郷里信州の血縁にあたる駒二郎の姪カメジを妻に迎える。
1894	明治27	28	11月長女・喜勢が生まれる。
1900	明治33	34	5月～「朝日新聞」にリットンの「ユージン・アラム」を『聖人か盗賊か』と題して連載した。
1902	明治35	36	『聖人か盗賊か』を上下二巻（3月・5月）、今古堂から刊行。春、「東京朝日新聞」に載せた「シーザー殺害」（マーク・トウエーン）の翻訳について、山縣五十雄氏と論争になる。
1904	明治37	39	1月東京・根岸精神病院に入院。8月死去。